

スペイン南部における

農業構造と人口流出

——人口地理学の一試論——

栗原尚子

一 はじめに

本論は、一九六〇—七〇年間の南部スペインにおける人口流出を農業構造との関連から統計資料・文献を利用して分析することを目的としている。

スペインでは、一九六〇—七〇年間に農業労働力人口は四六九・六万から二九七・七万に減少し、就業人口に占める割合も三九・七%から二四・八%と低下し、今世紀に入ってからいずれの時期と比較してもその減少の割合は最も大きかった。一方、工業労働力人口は、同時期に二三七・九万から三〇二・一万(二〇・一%から二五・四%へ)、商業・サービス労働力人口は、二六六・六万から三六九・七万(二二・六%から三一・二%へ)と増加を示し、産業構造の大きな変化を示している。

このような農業部門から非農業部門へ、農村から都市への人口移動が最も激しく進行しているのが、アンダルシア、エストラドゥラ、ムルシア地方の南部スペインであった。

人口移動を総合的にとらえる一般理論は、いまだ確立されていないが、人口移動を説明する基本的な一般理論としてよく知られているものが pull・push 理論である。このような視点からみるならば、いわゆる就業機会説、「アーバニズム」の理論は pull 理論であり、賃金格差説は push 理論といえよう。しかし、現実には、人口移動は pull・push 要因が複雑に絡んだ現象であり、賃金格差説と就業機会説を積極的に結合した理論化の試みも行われている<sup>(1)</sup>。

人口地理学では、人口移動は、人口地理学の一分野とみなされ、前述のような諸理論を基礎にふまえ、人口移動にあらわれた地域性を明らかにするとともに、その地域性を地域構造との関連において分析することを目的としているが、従来、地域性を明らかにする研究は多くみられたが、地域性を地域構造との関連から具体的に分析した事例は少なかったように思われる。このようななかで、本論は、南部スペインのラティフンディオ経営が卓越する地域における人口流出を、その地域構造との関連において検討することを試みたものである。

二 スペインにおける人口移動

スペインの人口移動を、国内と国外に分けて、一九六一—七〇年にわたって統計年鑑 Anuario Estadístico, España, と国立統計研究所 Instituto Nacional de Estadística の資料<sup>(2)</sup>を利用して概観してみよう。スペインでは、国内人口移動 migration interna に関する統計は、一九六一年からはじまり、県

表1 スペインにおける地域別人口移動数

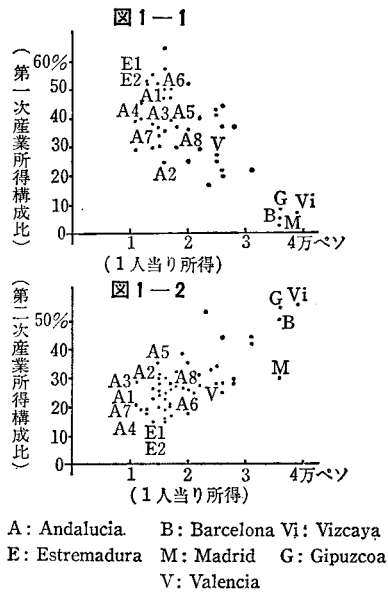
人 口	総 人 口		国内人口移動総数 (1961—1970)			流出人口 (1962—1970)			
	1960	1970	A 流入 人口	B 流出 人口	A-B	県 内		国 外	
						ヨ ー ロ ッ パ	万	万	万
I Andalusia oriental	264.1	263.8	10.3	39.5	-29.2	13.7	62.4 (82)	19.8	0.5
II Andalusia occidental	325.2	333.2	13.2	36.5	-23.4				
III Aragon	110.5	115.1	15.7	19.5	-3.8	8.4	9.8 (54)	0.9	0.2
IV Asturias	98.9	104.4	3.3	3.8	-0.5	1.8	1.9 (51)	0.9	0.7
V Baleares	44.3	55.2	3.3	2.5	0.8	1.8	0.7 (29)	0.2	0.1
VI Canarias	94.4	115.9	5.2	4.1	1.1	2.9	1.1 (28)	0.4	3.4
VII Castilla la Nueva	421.1	510.8	48.2	40.9	7.3	10.8	28.5 (73)	6.2	2.2
VIII Castilla la Vieja	221.9	215.8	22.8	36.4	-13.6	14.1	20.4 (59)	3.8	0.6
IX Cataluña	392.6	505.8	128.1	59.7	68.4	45.0	12.1 (21)	1.7	2.0
X Extremadura	137.9	115.7	6.3	26.5	-20.2	3.6	22.0 (86)	4.3	0.04
XI Galicia	260.3	258.6	7.2	13.3	-6.1	4.6	8.1 (64)	13.6	8.2
XII León	129.1	117.9	8.3	18.6	-10.3	5.6	12.3 (69)	4.1	0.5
XIII Murcia	118.1	116.8	4.1	12.4	-8.3	2.0	9.8 (83)	3.9	0.08
XIV Navarra	40.2	46.2	7.6	9.2	1.6	3.8	5.0 (57)	0.3	0.2
XV Valencia	248.1	304.3	45.4	25.3	20.1	17.8	6.3 (26)	4.8	0.4
XVI Vascongadas	137.2	185.1	40.6	22.7	17.9	15.3	6.0 (28)	0.6	0.6

注 (1) カッコ内の数字は流出人口総数に対する県外移動数の割合。

表2 スペインにおける地域別人口純移動率<sup>(1)</sup>

年	1961	1962	1963	1964	1965	1966	1967	1968	1969	1970
I Andalusia Oriental	84.1	81.6	80.2	77.4	77.4	72.5	68.4	62.0	62.2	68.1
II Andalusia Occidental	70.6	75.1	73.9	73.4	73.8	74.8	59.3	44.9	57.2	53.4
III Aragon	17.2	19.4	21.4	17.3	17.5	12.5	18.2	25.2	6.8	15.7
IV Asturias	33.9	23.3	13.9	23.9	7.3	17.4	0.5	16.2	5.1	8.6
V Baleares	+22.3	+41.5	+48.7	+48.2	+27.8	+8.0	+6.0	-7.3	+20.4	+29.8
VI Canarias	+8.9	+10.3	+25.6	+23.4	+13.8	+0.7	+19.8	+21.6	+32.4	+23.0
VII Castilla la Nueva	13.4	+0.9	+6.6	+11.7	+15.7	+8.9	+18.3	+27.7	+10.8	+18.8
VIII Castilla la Vieja	36.6	44.4	46.6	46.2	44.8	21.8	28.8	27.6	26.2	28.4
IX Cataluña	+62.9	+65.2	+63.3	+63.1	+59.8	+57.8	+46.9	+32.9	+40.7	+42.8
X Extremadura	72.6	81.3	83.7	82.1	82.3	75.8	68.1	61.1	63.5	74.8
XI Galicia	60.9	53.2	57.2	57.8	53.9	48.1	36.9	31.5	24.2	36.6
XII León	47.6	55.6	59.2	61.8	61.4	57.4	55.2	45.9	52.6	51.6
XIII Murcia	80.5	79.9	80.7	79.2	72.9	55.1	52.1	44.6	34.0	52.0
XIV Navarra	+7.7	+16.0	+11.3	+16.4	+17.9	+29.2	+25.8	+24.3	+23.0	+22.7
XV Valencia	+33.9	+43.2	+50.4	+54.0	+54.1	+41.3	+42.1	+37.2	+68.6	+40.0
XVI Vascongadas	+38.9	+51.4	+54.7	+56.6	+56.6	+36.9	+38.2	+28.3	+27.0	+31.1

(1) 純移動率=(流入人口)-(流出人口)/流出人口



Provincial)とに流出入地別移動数・年齢階層別数・職業従  
業地位別数・識字能力 analabeo 別数がとられ、移動人口の  
社会的要素を示す統計に不備があるとはいえ、国内人口移動の  
実態が把握できるようになった。国内・国外人口移動の地域性  
を、1 移動実数、2 純移動率によってみると、(1)大都市および  
工業地帯で、純移動率が六〇%を超える人口流入地域(バルセ  
ロナを含むカタルーニャ、マドリッドを含むカステイリヤス  
エバ、ヴァスコ、ナバラ、バレンシア)、(2)北部スペインの継  
続的緩慢な国内移動率と高い国外移動率を示す人口流出地域  
(アラゴン、アストゥリアス)、(3)南部スペインの国内・国外  
の移動率が高く人口流出が激しい地域(アンダルシア、エス  
レマドゥラ、ムルシア)、(4)(2)と(3)の地域の間において、国

内・国外移動率が高く、移動率が三〇%を超える地域(レオ  
ン・カステイリヤビエハ) (5) (4)と同様に移動率が高いが、国外  
とくにヨーロッパ以外の海外への移動率が特に高い地域(ガル  
シア) (6) 緩慢な人口流入地域であるバレアレスとカナリアの島  
嶼地域に大体地域区分できる。次に流入地別にみると、国内人  
口移動では、バルセロナ、マドリッド、ヴィスカヤ、ヴァレン  
シアへの流入人口が多く、毎年、バルセロナには十萬前後、マ  
ドリッドには五萬弱、ヴァレンシアには三萬弱、ヴィスカヤに  
は二萬前後が流入し、マドリッドへの流入が増加しているのが  
特徴的である。地域別にみると、マドリッド、ヴァレンシアは  
周辺県から、ヴィスカヤは、ヴァスコ地方、カステイリヤビエ  
ハ、レオン地方の諸県からの流入人口が多いのに対して、バル  
セロナはカタルーニャ、アラゴン、エストレマドゥラ、アンダ  
ルシア、アストゥリアス、ガルシア地方の広範囲の地域から人  
口が流入し、ヴァスコ地方の重化学工業化、マドリッドの工業  
化の進展にもかかわらず、依然としてスペイン最大の人口吸収  
地域である。国外移動をみると、フランス、スイス、ドイツへ  
の流入が最も多く、一九七〇年には、フランスへの流入人口の  
うち、一・八萬の移住人口に対して八・三萬の一時的季節移動  
があった。

このような人口移動を説明するものとして、各県の所得水準  
と移動数および各県の人口一人当り分配所得に対する第一次産  
業人口所得構成比と第二次産業所得構成比を図化してみると、  
所得水準が低い地域に人口流出の移動率が高いこと、県民所得

水準の低い農業県(アンダルシア・エストレマドゥラ・ムルシア)から高い工業化が相対的に進んだ工業県(カタルーニャ・ヴァスコ)に人口が移動していることが指摘できる。

### 三 南部スペインの農業構造

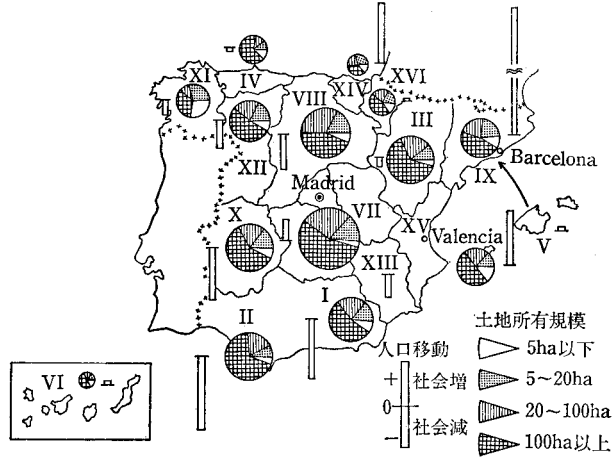
前節によると、アンダルシア・エストレマドゥラ・ムルシアの南部スペインは、所得水準が低く、一人当たり分配所得に対する第一次産業所得構成比の高いところであった。南部スペインの低開発性は、しばしば大土地所有制 *latifundismo* の問題とともに論じられている。大土地所有制の定義については、諸論があるが、ここではさしあたり、大農地を所有する農業経営体という意味で用いる。

スペインで、土地所有状況を地域的にみるのに、現在まで最もまとまった資料として利用できるのは、一九六二年の農業センサス *Primer censo agrario de España* である。これによって、地域ごとに、所有規模別に所有状況を概観してみると、全体で五〇―九〇%に達する五ha以下の農家数が農地の三―二七%を所有し、〇・二―五%の一〇〇ha以上の層が四―一七四%の農地を占め、中農層の数が少なく、零細農 *minifundista* と大農 *latifundista* の両極分化の傾向が、いずれの地域にも明らかで、これからみるかぎりでは、南部スペインの大土地所有制のみを指摘できない。これは、農業センサスが土地所有を所有主体別に区別していないためによるもので、一九五三年、五六年に行われた *Junta Nacional de Hermandades* の農業

調査および一九五七年以降の土地課税調査所が一七万ペソ以上の納税者のみに行っている調査統計によって補足すると、南部スペイン以外の大農地は、行政体の共有地 *municipal common land, commune* で、一九五九年には、南部スペインではそのような共有地が農地の七・七%を占めていたのに対し、北部・中部スペインでは、二三%を占めていた。さらに、北部・中部スペインが小土地所有者、分益小作 *aparceria a media* あるいは、カタルーニャのセンソ *censo*、ガリシアのフォロ *foro* といわれる小作制度が卓越する地域であることを考えるならば、南部スペインの大土地所有制は、レコンキスタ以降の歴史的形成過程が示すように、南部スペインに固有のものであるといえる。

一般的に南部スペインの大土地所有制の特質については、(1) グラナダ、東部アンダルシアのイスラム時代の灌漑施設が破壊されなかった所を除いては、ポンプなどの軽便なものをも含めて灌漑設備への資本投下が少ないこと、(2) 施肥量が小農経営の半分以下であること、(3) 小麦、綿花に特化したモノカルチャーが卓越していること、(4) 経営耕地面積の三〇―五〇%が借地農 *arrendador* に賃貸され、その借地面積はしばしば大規模であり、大借地農はさらに小作あるいは賃貸借地に出すという二重の借地関係がみられることが指摘されている。現在の大地所有制を成立させている経済的基盤に関する詳細な分析については、ここでは省略するとして、次に人口流出に強く影響をもたらす労働力状況を検討してみよう。

図2 スペインにおける人口移動の社会的増減と土地所有規模別面積比



南部スペインの農村における社会階層は、地域によって差はあるが、直接耕作者ではない大土地所有者と大借地農、直接耕作者である中規模の土地所有者と借地農、零細農、常雇いの農業労働者 *obrero agricola fijo*、臨時雇いの農業労働者 *obrero agricola eventual (bracero)* に大別され、ラティフンディオ

地域では、農業労働者が大多数を占めている。しかし、統計の上からみた農業労働者数の多寡のみで、直ちに人口流出に結びつけることはできないことは明らかで、その雇用状態が問題となってくる。その実態がかなり流動的であることもあって、南部スペイン全体にわたった資料は、今のところみられないが、Juan Martinez Alier によるラティフンディオの詳細な実態調査に基いたコルドバ県の研究は、とくに南部スペインの中でも人口流出のほげしいところでもあり、本論の分析には役立つものである。J. Martinez Alier は、まずラティフンディオの経営規模別に雇用労働力を調べ、栽培作物ごとの年間労働力を計算し、耕作面積をも考慮してコルドバ全体の農業労働力需要量を産出している。これによると第一にラティフンディオが雇用農業労働力によって成立している一面が示されること、第二に、その雇用労働力の需要量は、季節的変動が大きく、とくに最低の十一月は、最高の二月の三〇%を割っていること、第三に、需要量の多いオリブの収穫時(一―四月)、小麦の収穫時(六―七月)には、コルドバの農業労働者が常雇い一・五万、臨時雇い九・四万であることから推察しても、コルドバのみでは労働力需要量を満たしきれないことが明らかである。

農業労働者の移動は、一九三一年制定の *Ley de Terminos municipales* によって法的には制限されているが、現在では、農業労働者はかなり自由に、より雇用条件の良いところ、あるいは雇用主との個人的結びつきの強いところへ移動しており、その範囲は、隣接地域を越えてかなり遠距離化しているといわ

れる。<sup>(11)</sup>南部スペインでは、このような農業労働者の農業地域内での移動が、人口移動の重要な一類型をなしていることが注目される。

このような移動にもかかわらず、コルドバでは、結局は栽培作物のモノカルチャー構造に由来する収穫時の労働力不足は、最近の激しい人口流出に拍車をかけられて深刻であり、その解消のために一部機械化が促進されていると報告されている。<sup>(12)</sup>しかし、労働力不足の実態は、低賃金労働力が不足であって、機械化によって農業労働者は、雇用機会を失っているともいわれ、労働力不足の実態は定かではない。他方、収穫時以外は、労働力過剰となり、臨時雇いの農業労働者をどうみるかによって、正確にはその数は把握できないが、農村は失業人口であふれることになる。

コルドバをはじめとして、南部スペインの農業部内における労働力市場は、労働力不足と労働力過剰とが一般的状況といえる。

#### 四 南部スペインの人口流出

農業労働者の賃金 *Jornale* は、一九六二年の農業センサスによると、アンダルシアの五〇—六〇ペソ（一日）に対して、アストゥリアス、アラゴンでは七〇—一四〇ペソとかなり格差がある。年間所得についての統計は少ないが、I. N. E. の資料によると（指数のため実数は把握できないが）一九四八年からほとんど一定で変化がなく、五七年から六四年までは顕著な

上昇を示し、六四年春にはじまったいわゆる『農業危機』以降再び停滞している。加えて、インフレによる物価高騰のため、五七年からの上昇部分は相殺されるだけでなく、六五年には実質的には、二年前の水準に逆もどりしたといわれる。<sup>(13)</sup>『農業危機』とは、V. Perez Diaz によると、スペインの一九五〇年代末からはじまった工業化による経済発展の過程で、まさにつくりだされた『危機』であり、工業部門の生産性の上昇に比較した農業部門の停滞は、農業部門内における一九五—五八年の農業賃金の上昇と労働力不足、農産物需要の構造的変化<sup>(14)</sup>とが直接的原因となって、危機的状況をつくり出していると理解されている。<sup>(15)</sup>農工間格差の格大は顕著で、六三年には農業労働者一人当りの賃金二〇五〇ペソは、工業部門で最も低賃金の建設労働者の三五〇〇ペソの三分の二にも及んでいない。

このような賃金格差が Push 要因として作用し、賃金格差が大きく、潜在失業人口のプールとみなされる南部スペインから、農業部門から非農家部門へ、農村から都市への人口流出が促進されているといえる。換言すれば、『農業危機』による農村からの人口流出は、スペインの工業化の進展の中で、農業部門からの工業労働力析出過程といえよう。

工業化、都市化の進展に伴って、従来の人口流出の形態も変化してきている。一九五〇年代までは、男子労働力人口の流出 *emigration profesional* が主要をなし、出稼の性格が強かったのに対して、一九六〇年代に入ってから、あらゆる階層に及んだ普遍的な人口流出 *emigration universal* が増大し、出稼

に加えて家族全員による移住が多くなっているといわれる。<sup>(19)</sup> どのようにして具体的に人口流出がおこるのかという人口移動のメカニズムは、統計調査のみでは把握できない問題であり、実態調査が必要であろうが、この点についての研究は少なく、今後の研究課題であろう。

##### 五 結論および今後の課題

スペインの人口移動について、南部スペインの農業構造からみた人口流出に焦点をあて、その Push 要因を検討し、ラテンディオ経営の卓越する南部スペインの激しい人口流出は、多数の農業労働者および零細農が潜在的失業状態にあることに由来するものであることをみてきた。しかし、ラテンディオという大土地所有制度が卓越するところが常に高い人口流出地域であるという結論に達するのではない。このことは歴史的にも明らかで、一九二〇—三〇年代には、スペインで人口流出率が高かったのは、小土地所有制度、小作制度の卓越する北部スペインであり、南部スペインは、国内人口移動が少ないことが指摘されている。<sup>(20)</sup> 一九六〇—七〇年という工業化に伴う経済発展の著しい時期のスペインの人口移動を概観したとき、ラテンディオ経営という農業構造が、人口流出の最大の Push 要因として考えられるということである。この時期の南部スペインの人口移動が、スペインの人口移動の歴史の中でのように位置づけられるのか、北部スペインと南部スペインの人口移動の相違は、社会の発展段階との関連でとらえられるものであ

るのかどうかは、より詳細な長期にわたった分析が必要となる。

さらに、人口移動とは、単に空間的移動を意味するだけでなく社会階層間における移動をも含んだ総合的なものと考えられるが、——この視点からの人口移動の研究は、人口地理学の分野ではほとんど行われていない——移動人口が流入した都市社会でのその分析が必要である。本論との関連でいえば、バルセロナにおけるアンダルシアからの流入人口の社会的・経済的諸条件の分析によると、バルセロナの工業化に限度があるため、流入人口を第二次産業に吸収できず、建設業や第三次産業部門にかなり偽装的に吸収されていることが指摘されている。<sup>(21)</sup> このような指摘は、ラテンアメリカ等の低開発国に現われている現象と共通しており、低開発国としてのスペインの経済構造の問題にかかわってくるものである。

人口移動とは、複雑な諸要素が結合した現象であるだけに、総合的な視点が必要であるが、本論は、そのような段階に到る前段階としての分析を試みたものである。

(1) 梅村又次：「賃金・雇用・農業」、大明堂、昭和四七年、p. 198—208。

(2) John I. Clarke: "Population Geography" Pergamon Press, 1965, p. 123—137, Glenn T. Trewartha: "A Geography of Population", John Wiley & Sons, 1969, p. 135-161. 河辺宏：「人口地理学についての一考察」地理学評論三七巻一号 p. 1—13、「人口増加とその変動要素

- に關する地域の考察」東大教養学部人文科学科紀要三八輯 p. 25-43.
- (3) I. N. E.: "Migracion y estructura regional, Madrid, 1968, 111 p.
- (4) 大土地所有制については、ローマ時代のラティフンディウム、ラテンアメリカのラティフンディウム、スペインのラティフンディウムと同じ言葉を使用しても、大農地 finca grande, cortijo を意味だけになくその土地の経営形態を問題にする場合には歴史的に規定された社会経済の中での概念でありその内容は異つてゐる。J. Lambert によると「旧式の方法で粗放的に耕作される大農地」("Amerique Latine," PUF, Paris, 1963, p. 76) といふ。
- (5) Edward E. Malafakis: "Agrarian Reform and Peasant Revolution in Spain," Yale Univ. Press, 1970, p. 25-34.
- (6) J. Vicens Vives: "Historia economica de España," 1967. Cap. 13, 20, E. E. Malafakis, Ibid. p. 35-64. ノートナン(鈴木隆記):「スペインの迷路」合同出版一九六七年、93-130.
- (7) Joaquin Bosque Maurel: "Latifundio y Minifundio en Andalucía Oriental", Estudio Geograficos XXXIV No. 132-133, 1973, p. 457-500.
- (8) E. E. Malafakis, Ibid. p. 87.
- (9) Juan Martinez Alier: "La estabilidad del Latinidismo", Ruedo Iberico, 1968.
- (10) 町村の行政範囲を越えて、季節労働者が流入することを制限する法律で、地域内労働者の最低賃金を保障するものがある。
- (11) Martinez Alier, J., Ibid p. 24-26.
- (12) Martinez Alier, J., Ibid, p. 333-343.
- (13) Victor Perez Diaz: "Emigración y cambio Social," Ariel, 1971, p. 22-30.
- (14) Martinez Abier, J., Ibid. p. 27.
- (15) スペインにおける工業化は一九五〇年代末頃から始まり、鉄鋼生産は一九〇・四万トン(一九六〇)から七八九・二万トン(一九七〇)、電気エネルギー一八〇〇〇万キロワット(一九六〇)から一二三〇〇〇万キロワット(一九七二)、石油精製一三八三・四万トン(一九六六)から三二六五・五万トン(一九七二)と成長してゐる。
- (16) 例えば小麦栽培を例にとると栽培面積は一九六二年の四二五万ヘクタールから六七年まではほとんど変化ないが、六八年から減少し、七一年には三六五万ヘクタールに低下し、収穫量も六七年の五六五万トンから七一年には四二二万トンとなつてゐる。
- (17) 一九六二年と七〇年を比較すると穀物が減少し、野菜、果物、乾草の比重が増加してゐる。



- (81) Perez Diaz, V., *Ibid.*, p. 22—30, Martinez Alier, J., p. 27—28.
- (81) Perez Diaz, V., *Ibid.* p. 85—90.
- (82) E. Malafakis, E., *Ibid.* p. 103—110.
- (12) 兼清弘之:「人の動きと社会的空間」大明堂、昭和四五年、p. 204.
- (22) Emilio M<sup>a</sup>. Boix Selva: "La condicion social de los Inmigrantes", *Estudio Geograficos XXVII* (105), 1966 p. 547—560. Roland Courtot: "Geografía de las migraciones de trabajadores en la provincia de Va-

lencia," *Estudio Geograficos XXIX* 1968 pp. 499—526, Gabriel Marcos Cano Garcia: "Población inmigrada en el municipio de Murcia," *Estudios Geograficos XXXII* (122) 1971, p. 23—73 Jose Maria Martinez-Mari: "La inmigración en el area de Barcelona," *Estudios Geograficos XXVII* (105), 1966 p. 541—546.

(本論は、昭和四九年度文部省科学研究費総合A「地中海地域における都市と農村の地域的比較研究」(課題番号九三〇一〇二)による研究の成果の一部である)

(一橋大学助手)